

歴史的都市とその周辺地域との関係性についての研究

～郡上八幡を対象として～

1G03J028-1 沖野 俊介*

Shunsuke Okino

現代、都市交通システムや通信技術、商業施設の発展による都市周辺の田園地帯の宅地化により、その都市の形は溶解し、広がりを見せている。このような都市スプロールは今後も起こるであろうことであり、今後の都市開発には不可避な問題である。本研究では、旧城下町であり、積極的なまちづくりがみられる郡上八幡の周辺地域を対象とし、その地域における都市としての機能、および住民のまちへの意識を具体的に把握、分析することで、歴史的都市と周辺地域との関係性を明らかにする。

Key Words : 都市スプロール、田園都市、間にある都市、郡上八幡

1. 研究の背景、目的

現代、交通システムの発展や商業開発、そして通信技術の革新により、人々のライフスタイルは大きく変化し、生活においてもその行動範囲は広がってきている。そのため、旧城下町のような歴史的に形成されてきた都市においても、その周辺地域の開発によって都市のスプロール化が見られ、はっきりとした形を持たない、今までとは全く異なる都市構造を有する地域が多く見られるようになった。都市スプロールの問題点として、都市周辺の農地や緑地のある地域の宅地開発などによる環境上の問題、防災上の問題が挙げられる。また、画一的な宅地開発に対してそれぞれの地域におけるアイデンティティが失われていくということも問題である。明確な形のある都市の構造の保存や充実が、これらの問題に対し一番良い対策ではあるが、昔と比べて交通や通信技術が劇的に進化した現代では難しい。

こうした状況をふまえ、歴史的都市とその周辺地域を含めた現代における広域的な『都市』としての形について考えていく必要がある。本研究では、その基礎となる手がかりを得るために、歴史的な都市の周辺地域に住む人々の、自身が住む地域や歴史的都市に対する意識や要望、そして生活におけるそれぞれの行動の実態を把握することで、歴史的都市と周辺地域の関係性を明らかにすることを目的とする。

対象地は、旧城下町で、水を活かしたまちづくりを行い、明確なイメージのある郡上八幡の中心部に隣接する地域を対象とする。

2. 研究の概要

2.1 対象地の概要

郡上八幡は岐阜県のほぼ中央に位置し、古くから東海地方と北陸地方を結ぶ交通の拠点となっていた。周囲は和良山脈、越美山脈などの山脈で囲まれている。長良川の上流に位置し、吉田川、小駄良川 3つの川が合流するところに市街地がある。その中心部は、1559年に八幡城が築かれ、郡上地方の政治経済や文化の中枢をなし、広く有名な「郡上踊り」をはじめとする独自の文化を育んできた城下町であり、その中心部では、積極的なまちづくりや景観保存が行われている。周辺地区には、幹線道路が通り、以前は田園の広がっていた地域にも住居や商業施設が多く見られるようになり、今後も増えていくと思われる。

本研究では、旧城下町地区に隣接している周辺地域の中から小野、五町、そして初音・中坪地区を対象とする。対象地の位置を図1に示す。



図1.対象地の位置

* 早稲田大学理工学部社会環境工学科 景観・デザイン研究室4年

なお旧城下町の地区と五町地区の間には、大正町など、近代以降に開発された地区があるが、旧城下町地区と同様に自治会によるまちづくりが行われているため対象としなかった。

2.3 研究の方法

以下の手順で研究を行う

1) 問題意識の整理

形をもたない地域を対象として評価、分析するにあたってその基準となる概念を整理する。

2) 対象地区の現状把握

都市計画マスタープランによる制度下の位置づけおよび現地調査による建物のタイプの分類から、それぞれの地区の特性を把握する。

3) アンケート調査の分析

概念の整理を基に住民へのアンケート調査を行う。生活行動の特性や地域認識、地域への要望や評価などを把握して分析する。

4) 考察、まとめ

3. 問題意識の整理

研究の背景で述べたような、スプロールの見られる地域について論じたものとして、Thomas Sieverts の著作が挙げられる。Thomas Sieverts は、ドイツをはじめとするヨーロッパの都市を今後どう取り扱っていけば良いのかという問題について、この開発された田園地域を Zwischenstadt 『間にある都市』と名付け、新しい経済構造下におけるその位置付けを分析・考察し、都市計画・都市デザインの今後の課題と計画像を提起している。

『間にある都市』とは、『昔からある諸都市の中心と広々とした田舎の地域の間にある、生活空間の場と、場を形成しない流動中の空間の間にある、小規模な地域経済循環と世界市場に從属した循環の間にある、都市』を意味する。郡上八幡においても、周辺の田園地帯で市街化が進んでおり、今回の対象地区は、『間にある都市』の一部として考えられる。

次に、Thomas Sieverts は『間にある都市』の位置付けを認識するためにはまず都市の概念を把握する必要があるとし、都市の理論を語る上で必要な概念として、都会性・中心性・密度・用途混合・エコロジーという5つの項目を挙げている。

また、『間にある都市』を明確に認識できるようにするために以下の7つの命題を提示している。

- 1)各地域におけるアイデンティティを認識すること
- 2)住民の地域への意識の変化、雇用の変化の認識
- 3)場との新たな関係を持つこと、地域認識
- 4)環境・交通問題に対する広域的な取り組み
- 5)格差による都市の断片化の阻止
- 6)地域内および地域外への良好な交通ネットワーク
- 7)広域的な行政管理

本研究では、『間にある都市』で提示された概念を参照しながら、住民に対するアンケートを作成し調査を行うことで、対象地における歴史的な中心都市と周辺地区との関係性を明らかにする。

4. 現況把握

3.1 現地調査の概要

住民のまちへの意識や地域内のまちなみの特徴を明確にするために建物を以下の5タイプに分類した。

- 1) 伝統的仕様の住居
- 2) 現代的だが景観に配慮している住居
- 3) 現代的で地域性の感じられない住居
- 4) 店舗、店舗・住居兼用の建物、会社
- 5) 学校、および公共施設



図2 伝統的仕様の住居



図3 現代的で地域性の感じられない住居

表1. 現地調査の時期と対象地区

対象地区	調査日	調査建物件数(%)						
		全体	①	②	③	④	⑤	
小野	12月2日(土)	全体	606件	39件(6.4%)	502件(82.8%)	14件(2.8%)	46件(7.6%)	5件(0.1%)
		①	187件	8件(4.3%)	115件(61.5%)	3件(1.6%)	61件(32.6%)	0件(0.0%)
五町	12月3日(日)	全体	256件	7件(2.7%)	194件(75.8%)	4件(1.6%)	46件(18.0%)	5件(2.0%)
		①	187件	8件(4.3%)	115件(61.5%)	3件(1.6%)	61件(32.6%)	0件(0.0%)
初音・中坪	12月4日(月)	全体	256件	7件(2.7%)	194件(75.8%)	4件(1.6%)	46件(18.0%)	5件(2.0%)
		①	187件	8件(4.3%)	115件(61.5%)	3件(1.6%)	61件(32.6%)	0件(0.0%)

3.2 対象地区の現況把握

ここでは、現地調査をもとに、対象地区の特徴や現況について把握する。

2) 小野地区

八幡の中心市街地の東にあり、他の周辺地域と比べると面積が大きく、中心部では見られない田園風景が広がるが、中心部と同様に、地域内には用水路も見られる。住居が多く、また住居の敷地は広く、ほとんどの家が庭付きであった。

北側の山の近くには用水路が多く、水路を生活に取り入れるという地域の特徴をいかした伝統的な様式の住居が見られた。一方、現代的で地域性の感じられない住居の多くは、近年に建てられた様子であり、今後もこの様な住居は増えていくと考えられる。まちの中を通る幹線道路沿いには、商業施設が多く建ち並んでいる。



図 4.小野の用水路と田園風景

2) 五町地区

中心部から北西の長良川沿いにあり、東海北陸自動車道や長良川鉄道、および国道などの、八幡と他の都市とを結ぶ道路、鉄道が通る地域である。他の地域と比べ小工場や会社が多く見られる。最近でも田園が開発され、電化製品店や書店、飲食の大型チェーン店ができています。用水路も少なく、他地区とは異なるまちなみが見られる。



図 5.五町を通る鉄道と田園風景

3) 初音・中坪地区

初音地区は地理上の区分としては中心市街地から北に、非常に広い面積を持つ地区であるが、今回はその中の一部で中心部に近い地区を対象とした。中心市街地の中でも特に歴史のある鍛冶屋町や柳町に接しており、中心部同様、通りに面してファサードを整えたまちなみが見られる場所もあり、用水路も見られる。中坪も同様に中心部の北に位置している。地区内を通る幹線道路沿いには飲食施設が多い。山に近い坂道が多く面積が小さいので、新しい住居はあまり見られなかった。初音地区と中坪地区は自治会としては別の地区に属して名称も異なるが、隣接しており特性にも大きな違いがないため、調査においては両者を合わせて1つの地区とする。



図 6.初音のまちなみとオープンスペース



図 7.中坪にある住居と用水路

3.3 中心部と対象地区の比較

各対象地区と中心部の用途地域指定状況と、まちづくり活動の有無を表 2 に示す。

表 2.中心部と対象地区の比較

	用途地域指定	まちづくり活動
中心部	商業地域 近隣商業地域 第1種住居地域	○
小野	第1種住居地域 第2種住居地域 第1種中高層住居専用地域 第2種中高層住居専用地域	×
五町	第1種住居地域 第2種住居地域 準工業地域	×
初音・中坪	第2種住居地域 第1種中高層住居地域	×

中心部では旅館や飲食店、スーパーやお土産屋などの商業施設が見られる。自治会のまちづくり活動によって歴史的なまちなみが保存されており、通りに面してファサードの整えられたまちなみが見られる。商業地域、近隣商業地域に指定されているが、密度が高いため住居や商業施設などの増加は見られない。一方、周辺地域はかつて田園地帯であったため、空間にゆとりがあり、まちづくり活動も行われていないため、自由な様式で住居や施設を建てることできる。そのため田園の開発による商業施設や住居の増加が多く見られ、新たな経済活動や生活空間をつくりながら拡大している地域である。

5. 調査の概要

5.1 アンケート調査の概要

対象地区の、都市としての姿や特性を認識するために住民へのアンケート調査を行なった。アンケート内容は以下に示す。

1)回答者の属性

性別、年齢、居住歴、以前に住んでいた場所、今後別の場所に引越したいか否か

2)生活における行動の範囲

買い物・休日の際に訪れる場所、移動手段、移動時間

3)回答者の住む地域への意識、評価

自然環境、密度、歴史性、防災・治安、交流、利便性・快適性に対する評価

4)八幡の中心部との回答者自身の関わり

中心部を訪れる頻度、郡上踊りに参加する頻度

5)中心部と周辺地区のイメージ

6)中心部への要望

公共・商業・飲食・文化・福祉施設の充実、歴史的なまちとしての保存をして欲しいか否か

7)周辺地区への要望

公共・商業・飲食・文化・福祉施設の充実、まちづくり、地区の発展をして欲しいか否か

8)地域認識

『日常的に感じる自分のまち』『郡上八幡のまち』を地図上に記入

また、現地調査によって得られたそれぞれの地区の特性をふまえた上で、地区同士の調査結果の比較も行う。

アンケートは、各地区の住居にポスティングし集計する方法を取った。アンケートの配布・回収結果を表 1 に示す。各地区全体での回収率は 28.83%であった。

表 3. アンケート配布・回収結果

配布地域	配布期間	戸数	配布数	回答数	回答率
小野	12月2日(土)	約570	503	143	28.42%
五町	12月3日(日)	約130	137	35	25.55%
初音・中坪	12月4日(月)	約230	241	76	31.54%

5.2 調査結果

1)回答者の属性

表 4.回答者の属性

項目	人数(人)			項目	人数(人)					
	小野	五町	初音・中坪		小野	五町	初音・中坪			
① 性別	男性	70	23	35	③ 1年未満	7	1	10		
	女性	70	12	36		1~5年	17	3	4	
	不明	3	0	4		6~10年	8	3	7	
② 年齢	10代	1	0	2	④ はい	114	24	50		
	20代	5	0	1		いいえ	22	10	22	
	30代	5	3	5		不明	9	1	4	
	40代	19	8	12		⑤ はい	17	2	13	
	50代	34	6	21			いいえ	102	27	50
	60代	32	3	12			どちらでもない	16	5	9
70代	41	13	19							
80代以上	5	2	1							

- ①性別 ②年齢 ③居住歴
- ④以前別の場所に住んでいたか⑤今後引越したいか

回答者の年齢は高く、また居住歴が長いいためか、今後別の場所に引っ越したいという人は少なかった。また、『以前別の場所に住んでいたことがある』と答えた人の、約半数は中心部から引っ越してきた人であり、その理由として、前の家が狭かったためという理由や、周辺地区に土地を持っていたためという理由などがあつた。引っ越しをした人の約 80%が以前にも八幡町内に住んでいた人であり、郡上八幡への愛着が感じられる。

表 5.以前に住んでいた場所

以前に住んでいた場所	人数(%)		
	小野	五町	初音・中坪
中心部	52(45.6%)	26(53.1%)	14(58.3%)
八幡町内周辺地区	40(35.1%)	13(26.5%)	8(33.3%)
八幡町外	22(19.3%)	10(20.4%)	2(8.3%)

2)生活における行動の範囲

周辺地域の住民が、食料や生活必需品のような日常的な買い物の際に訪れる場所、電化製品や家具などの買い物の際に訪れる場所、休日に訪れる場所について調査を行った。3つの目的それぞれに、4ヶ所まで記入をしてもらった。目的地の分類および各地域における調査結果を示す。

表 6.目的地と移動時間

目的地	移動時間
郡上市	中心部 小野地区 五町地区 初音・中坪地区 大和町 その他郡上市内
その他	高山市 関市 美濃市 岐阜市 名古屋市 その他

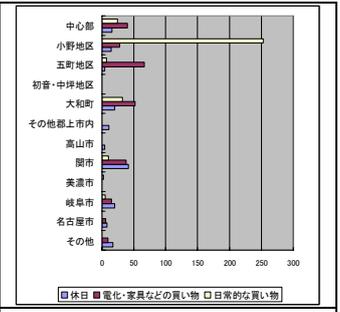


図 8.小野地区の住民の行動

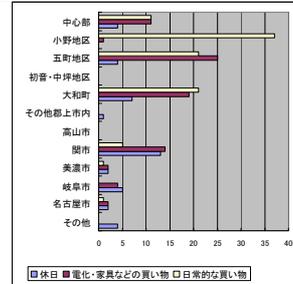


図 9.五町地区の住民の行動

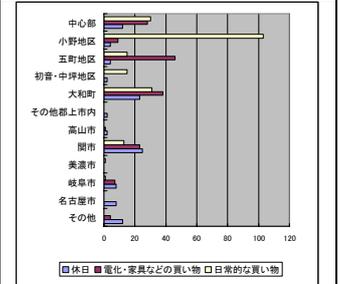


図 10.初音中坪の住民の行動

各地区でそれほど大きな差は見られず、同様の結果が得られた。日常的な買い物の際には、大きなスーパーのある小野を訪れる人が多かった。また、五町は家具や電化製品を買う際には多く人が訪れており、目的に応じて訪れる地区に違いが見られた。また、10分程度で行くことができる中心部よりも、自動車で行くことができる大和町や、約60分で行くことのできる関市を訪れる人がどの目的の際にも多かった。住民の行動範囲は自動車利用が中心で、行動範囲も広がっていることが分かる。

3)回答者の住む地区への意識、評価

各地区で、同様の結果が得られた。それぞれの地区での結果の合計を図 11 に示す。

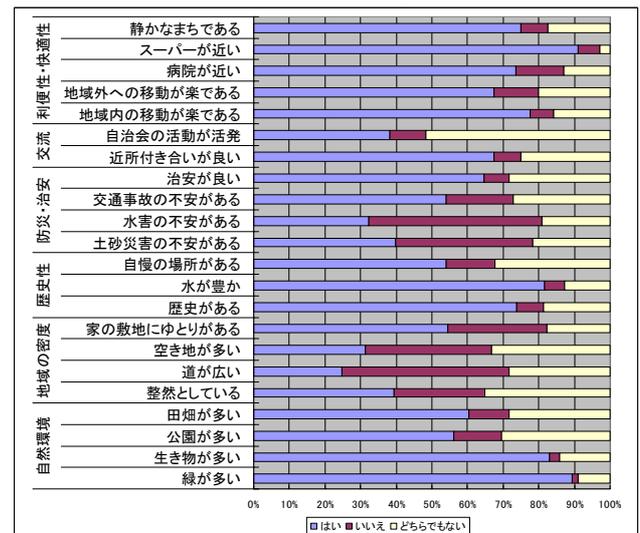


図 11.住民の地区への評価 (3地区合計)

利便性、快適性については非常に高い評価をしており、住民は生活環境に満足していることが分かる。近所付き合いが良いという評価から、住民同士の交流が活発であると考えることができる。密度にお

いては、道や空き地に関する質問でははっきりとした評価は出なかったが、各住居において敷地にゆとりがあり、ゆったりとした空間を取れていることがわかる。また環境・防災面をみても評価は非常に高く、その土地の歴史性についても高い評価をしており、地域の特徴をしっかりと認識していることが分かる。

4)八幡の中心部との回答者自身の関わり

中心部は商業地域に指定されている地区を含んでおり、本来は生活には欠かせない位置づけにあるはずであるが、ほぼ毎日中心部を訪れる人は全体の30%にとどまった。また、夏に中心部で行われる伝統行事の郡上踊りには、ほとんど参加しない人が多く見られた。これについても3地区ともほぼ同様の結果が得られた。結果の合計を表6に示す。

表7. 中心市街地・郡上踊りに訪れる頻度(3地区合計)

市街地を訪れる頻度	人数(人)	郡上踊りに参加する頻度	人数(人)
ほぼ毎日	78	毎年良く参加する	26
週に1・2回	110	何年かに1回は参加する	30
月に1・2回	56	ほぼ毎年徹夜踊りに参加する	10
3ヶ月に1回程度	5	ほとんど参加しない	107
半年に1回程度	9	毎年1回程度は参加する	62
1年に1回程度	1	参加したことがない	13

5)中心部と周辺地区のイメージ

次に、各地域と中心部とのイメージを比較すると、小野、五町、初音・中坪は住宅地というイメージや、緑や河川という自然環境のイメージが多く見られた。それに対し中心部は城下町、郡上八幡城、郡上踊りそして観光地といった歴史的、伝統的なものへのイメージが多かった。中心部のイメージとして強いものは周辺地域では連想されず、反対に周辺地域で強いイメージを持つものは、中心部のイメージとしては結びついていない。周辺地域の住民は中心部と周辺地域に関して対照的なイメージを持っていると考えることができる。また、今回まちのイメージを把握するにあたって、15個の項目の中から4つまでを自由に選択してもらった方法を取ったが、その回答数を比較すると、周辺地区の回答数の方が少なく、周辺地区の特徴はあまり認識されていないと考えることができる。

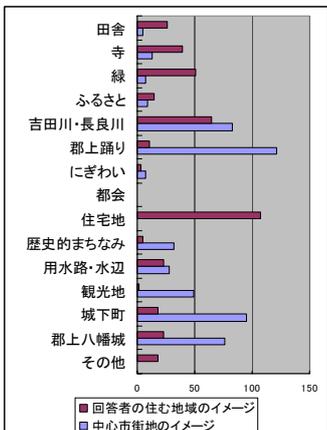


図12.小野地区と中心部のイメージ

表8. 地域へのイメージの回答

	中心市街地のイメージ	周辺地域のイメージ
回答数	925	686
一人当りの平均	3.64	2.7

6)中心部への要望

中心部への要望としては、商業施設などの充実に対する強い要望などは見られなかったが、対象の3地区いずれにおいても、観光地としての整備、保存、病院・福祉施設と文化・娯楽施設の充実、そして公共交通の充実に対する要望が強く見られた。3地区の結果の合計を図12に示す。

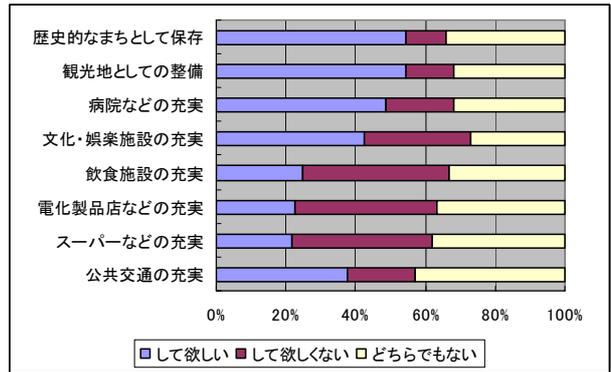


図13. 周辺地区の住民の中心部への要望 (3地区合計)
周辺地域の住民は、中心市街地を歴史的、伝統的なまちととらえ、発展を望んでいるが、それは周辺地区の住民の日常生活とは密接な関わりを持っておらず、自分の住む地区と中心部とを切り離してとらえていると考えることができる。

7)周辺地区への要望

周辺地区の住民の、自分の住んでいる地区への要望は、中心部と同様に、病院・福祉の充実が多かった。全体的に強い要望は見られず、現状にある程度満足をしていると思われる。

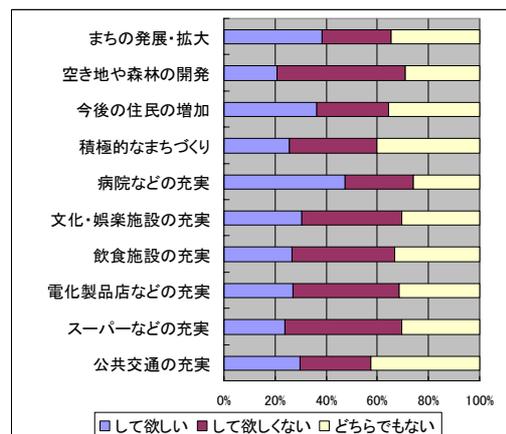


図14.周辺地区への住民の要望 (3地区合計)

地区ごとに見ていくと、小野地区では強い要望は見られないが、五町地区ではスーパーなど商業施設を充実させて欲しいという意見が多く、初音・中坪地区ではまちの発展・拡大、住民の増加を望む意見が多かった。

8)地域認識

ここでは、住民が思う、『日常的に感じるまち (A)』と『郡上八幡のまち (B)』をそれぞれ地図上に記入してもらった。A と B の位置関係は図 15 のような 5 タイプに分類される。

- Type.1 : A と B が同じもの
- Type.2 : A の中に B があるもの
- Type.3 : B の中に A があるもの
- Type.4 : A と B が一部分で重なっているもの
- Type.5 : A と B が重ならず離れているもの

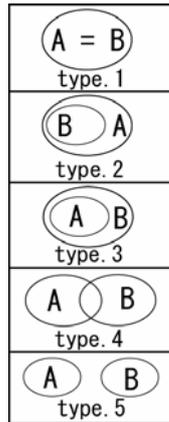


図 15.位置関係

図 15 をもとに地区ごとに位置関係のタイプを分類した。

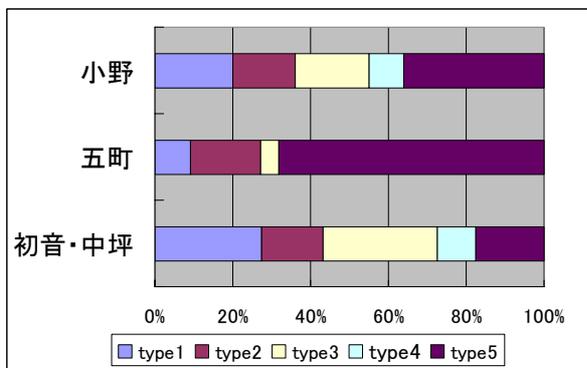


図 16. 地区ごとの地域認識の違い

また、A に中心部は含まれているか、B に自分の住む地区は入っているか、について分類を行った。分類結果を以下に示す。

表 9.中心部と住んでいる地区の認識

対象地区	項目	入っている	入っていない
小野	①	39人(39.0%)	61人(61.0%)
	②	46人(46.0%)	54人(54.0%)
五町	①	1人(4.5%)	21人(95.5%)
	②	6人(27.3%)	16人(72.7%)
初音・中坪	①	42人(82.4%)	9人(17.6%)
	②	20人(39.2%)	31人(60.8%)

①『日常的に感じるまち』に中心部は入っているか
②住民の思う『郡上八幡のまち』に自分の住む地区は入っているか

小野地区の住民は、日常生活において郡上八幡と密接な関わりを持っているという意識やそうでない意識など、人それぞれで多様な意識を持っていることが分かる。五町地区では、郡上八幡のまちを意識していない人が多く見られ、また、初音・中坪地区は小野と似たような結果を得たが、type.1,2,3 のような、密接な関わりを持っているという意識が多く見られた。

6. 考察・まとめ

6.1 地区ごとの違い

地域認識の項目をみると、小野、初音・中坪地区では人によって様々な認識をしていることが分かったが、五町地区には郡上八幡のまちに自分の住む地域は含まれていないと考えているひが多かった。その理由として、五町地区には郡上八幡の特徴でもある用水路が少ないことや、商業施設が多く、中心部のまちなみと大きく違っていることや、関市や大和町などの近隣の都市へのアプローチが容易にできるため生活において中心部にあまり依存していないためだと思われる。

6.2 全体を通して

生活における行動を見ると、中心部に頻繁に訪れる人は少なく、目的によって訪れる場所は違っていることが分かった。また、そういった状況においても住民の地区への評価は高く、現在の状況に満足していることが分かる。かつて中心部が持っていた都市としての形が溶解し、現在は広範囲での都市としての形があることが分かった。今後も周辺地区における商業施設などの増加によりさらに都市としての形が変化していくと考えられ、より広範囲での計画が必要である。

住んでいる地区と中心部へのイメージについてみると、周辺地区では、住宅地というイメージを持つ人がほとんどであり、他には地域内を流れる川などの自然に関するイメージが多かった。周辺地区のイメージは中心部よりも少なく、中心部と周辺地区のイメージは今回の項目を見ると対照的な結果となっていた。また、中心部への要望をみると、中心部の歴史的なまちとしての保存などの回答が多く、周辺地区の住民は中心部と周辺地区を切り離して考えていることが明らかになった。イメージの少ない周辺地区のアイデンティティの確立のためには、中心市街地と関係づけて、広い範囲でのイメージをつけていくことが必要なのではないだろうか。

《参考文献》

都市田園計画の展望 『間にある都市』の思想 (2006) : Thoms Sieverts 著 蓑原 敬 監訳 学芸出版社
 日本型都市計画とはなにか(2002): 西山 康雄 著 学芸出版社
 日本型田園都市論 (1985): 石見 尚 著 柏書房
 八幡町都市計画マスタープラン (1996): 八幡町
 八幡町のまちなみづくり 八幡町景観形成基本計画調査報告書 (2000): 八幡町
 郡上市役所HP : <http://www.city.gujo.gifu.jp/>